

第 52 号  
2009. 6

# 北海道 米麦改良

今後の小麦病虫害防除の徹底

麦作

平成20年度・全国麦作共励会「農林水産大臣賞」  
佐賀県杵島郡江北町・武富和也氏の麦作りを視察  
6月の営農技術対策



小麦の赤かび病防除

会報誌「北海道米麦改良」はホームページでもご覧になれます。  
<http://www.beibaku.net/>

社団法人 北海道米麦改良協会

売れる米を 低コストで 安定生産

めざそう 小麦の 品質向上

農産物検査の信頼性確保  
を目指して

JA グループ北海道は一丸となって  
農産物検査の信頼性確保に努めています

も く じ

麦作	今後の小麦病虫害防除の徹底……………	1
	平成20年度・全国麦作共励会「農林水産大臣賞」	
	佐賀県杵島郡江北町・武富和也氏の麦作りを視察……………	5
	6月の営農技術対策……………	8

## 麦 作

## 今後の小麦病虫害防除の徹底

北海道立中央農業試験場 技術普及部 主任普及指導員 木 俣 栄

平成21年は全道的にも融雪が早く、秋まき小麦にとっては生育もすすみ、やや干ばつ傾向にあったものの生育は順調と考えられる。春まき小麦については、出芽後の生育は平年並みで推移している。

今後麦類の収穫を確実にするためには施肥管理の他に、病虫害防除の徹底が重要となる。

## 1 赤かび病防除

赤かび病は、その病原菌であるフザリウム菌が産生するデオキシニバレノール (DON) が食品としての小麦では下痢など、我々の健康を脅かす物質として規制が強化されてきた。

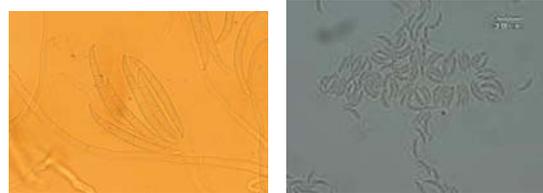
このため、生産場面においては、赤かび粒の混入は0.0%、小麦の DON 濃度も1.1ppm以下と厳しい基準が設定され、防除の徹底を図るようになった。

本年は春先の天候が良く、気温が高かったことから、小麦の生育ステージも進み、出穂がやや早まる傾向にあるため、防除時期を逸しないことが重要である。

また、赤かび病はカビ毒を産生するだけでなく、発生が拡大しうることによって、子実の登熟を阻害し減収となる。



春まき小麦の穂についた赤かび病菌



フザリウム・グラミネアラム (DONを産生)      ミクロドキウム・ニバーレ (DONを産生しない)

図1 赤かび病菌胞子

## (1) 病原菌

北海道で確認されている赤かび病原菌は、フザリウム菌とミクロドキウム菌でフザリウム菌の中でも3種類あり発生も様々である。

全道的に発生が多いのがフザリウム・グラミネアラムで、この菌が最も DON の産生力が強いとされている。

発生条件として高温、多湿を好むことから、感染時期の気象条件により多発となる。

紅色雪腐病の菌と同じものがミクロドキウム・ニバーレである。(図1)

この菌によるカビ毒の産生は認められない。

この菌の発生条件としては冷涼な気候を好むことから、道東地区での発生が多い。

穂に形成された分生子は肉眼で菌種は特定できない。

## (2) 感染時期

これらの菌の感染時期は、開花初期と乳熟期であり、特に開花時期の小花の合わせ目や、穂軸、小穂から露出した雄ずいが感染源となる場合もある。

## (3) 防除のタイミング

1回目の防除は極めて重要であり、薬剤の

効果を最も高めるためには、被害の出る穂全体に散布する必要があることから、穂が出揃った開花始が効果的である。

2回目以降の防除は1回目の散布後7日間を基本とするが、降雨後の赤かび病菌の胞子飛散が多いため、気象予報に留意して散布時期を決める。

秋まき小麦、初冬まき、春まきと、播種時期に違いがあることから、各小麦の出穂期的に把握し、防除のタイミングを逸さないように注意する。

とくに、1回目防除は、穂全体に防除薬剤がかからないと十分な効果が得られないため、出穂が揃い、開花始の時期を逃さないよう圃場観察を行う。

#### (4) 散布回数と防除薬剤の選択

出穂期以降の好天が期待できる場合、上記防除タイミングが実施できる場合は、春まき小麦「春よ恋」で初冬まき、春まき共に3回、秋まき小麦「ホクシン」で2回の防除でDON濃度を基準値内に抑える効果が得られる。

「ハルユタカ」については赤かび病の抵抗性が劣ることから防除回数は4回を基本とし実施する。

薬剤の効果については赤かび粒の抑制効果や、DON濃度の抑制効果に差があるため、表1の効果を参考にし防除薬剤の選択を行う。また、登熟時期に降雨が多い場合、薬剤の使用時期、使用回数を考慮し、防除の検討を行う。

#### (5) 耕種的防除対策

赤かび病の防除にあたっては薬剤防除以外にも以下の耕種的防除対策を励行する。

- ① 春まき小麦は早期播種に努める。
- ② 窒素施用量を抑え倒伏を軽減する。
- ③ 適期に収穫し、適切な乾燥・調製を行う。

## 2 うどんこ病防除

秋まき小麦「ホクシン」春まき小麦「ハルユタカ」「春よ恋」は抵抗性品種であることから、出穂前の薬剤防除は不要であるが、近年

表1 薬剤の評価

薬剤名	希釈倍数	使用時期	赤かび粒率に対する効果	外観健全粒DON濃度に対する効果	DON濃度に対する効果	総合評価
シルバキュアフロアブル	2000	14日前	A	A	A	○
チルト乳剤25	1000	3日前	C	D	C	△
	2000	3日前	C	D	C	△
トリフミン水和剤	1000	14日前	C	D	C	△
ストロビーフロアブル	2000	14日前	B	C	B	△
	3000	14日前	B	C	B	△
アミスター20フロアブル	2000	7日前	D	D	D	×
	3000	7日前	D	D	D	×
トップジンM水和剤	1500	14日前	B	A	A	○
ベフラン液剤	1000	14日前	C	A	A	○
	2000	14日前	C	C	B	△
ベフトップジンフロアブル	800	14日前			A	○
	1000	14日前			A	○
水和硫黄剤	400	—	D	D	D	×

注1) シルバキュアフロアブルの防除効果を基準として、ほぼ同等 (A)、やや劣る (B)、劣る (C) 著しく劣る (D) の四段階に評価した。

注2) 赤かび病防除薬剤として、効果が高い (○)、効果がやや低い (△)、効果が低く防除薬剤として用いない (×)。

表2 小麦の赤かび病に対する防除対策

項目	春まき小麦		秋まき小麦	
	実施方法	備考	実施方法	備考
対応品種	「春よ恋」 「ハルユタカ」 「はるきらり」	抵抗性‘中’ 抵抗性‘やや弱’ 抵抗性‘中’	「ホクシン」 「きたほなみ」	抵抗性‘やや弱’ 抵抗性‘中’
防除回数	開花始より 1週間間隔で 3回散布する	「ハルユタカ」を栽培する場合には4回散布	開花始と1週間後の2回散布	以降降雨が続く場合3回目の散布も検討する
薬剤選択	効果の高い薬剤として、シルバキュアフロアブル(2000倍)、ベフラン液剤25(1000倍)、トップジンM水和剤(1500倍)を用いることが望ましい。	防除例 1回目 シルバキュアフロアブル 2回目 ベフラン液剤25またはトップジンM水和剤 3回目 シルバキュアフロアブル	効果の高い薬剤として、シルバキュアフロアブル(2000倍)、ベフラン液剤25(1000倍)、ベフトップジンフロアブル(1000倍)、トップジンM水和剤(1500倍)を用いることが望ましい。	防除例 1回目 シルバキュアフロアブル 2回目 ベフラン液剤25またはトップジンM水和剤またはベフトップジンフロアブル

注1) 同系統の薬剤の連用を避ける。 注2) 初冬まき栽培も本対策に準ずる

注3) DON汚染と赤かび粒率の基準に対応するため、薬剤防除に併せて早期播種、倒伏防止など耕種的対策、および適切な収穫・乾燥調整を行う。

注4) ミクロドキウムではトップジンM水和剤の耐性が確認されているため多発すると防除効果が劣るため、過去に多発した地域では使用しない。



株元からあがってきたうどんこ病菌

うどんこ病菌の進展が上位葉まで見受けられる場合があるため、出穂前に上位葉まで病斑がみられる場合は防除を実施する(茎数が多く過繁茂している圃場等は要注意)。

麦の登熟には止葉および次葉を健全に保つことが重要。

出穂以降は赤かび病の防除薬剤で対応が可能である。

### 3 赤さび病防除

秋まき小麦の基幹品種となっている「ホクシン」は赤さび病に弱く、薬剤による防除が必要となる。赤さび病の発生環境は、高温小雨傾向で発病が助長され、蔓延が早い、高温時の圃場観察を実施し発生初期に薬剤防除を行う。

防風林で囲まれた圃場などでは地形的に急激に気温が上がり発生が助長される場合があるため注意する。



葉に発生した赤さび病菌

#### 4 ムギキモグリバエ防除

近年この虫による被害が拡大している。本年は4月の気温が高かったことから害虫の発生も早く、ムギキモグリバエの発生も早い傾向にある。

幼虫は麦の茎に潜り込み、節に近い柔らかい部分を食害するため、上部の茎などは枯死して心枯れや出穂不能などとなり、出穂数が減少し減収となる。

発生初期からの防除が必要で最低2回の防除が重要となる。

#### 5 ムギクロハモグリバエ防除

ムギクロハモグリバエもやや発生が早まっている。秋まき小麦は生育ステージが進んでいることから、減収に結びつく被害は無いと思われるが、春まき小麦については6月中～下旬の被害が懸念される。葉に食害跡が確認され、被害葉率が12%を超える場合薬剤防除が必要となる。



秋まき小麦の葉に潜った幼虫被害

#### 6 アブラムシ防除

アブラムシの発生については圃場の端で見られる場合があるが、防除の要否については、出穂10～20日後に1穂平均7～11頭以上の寄生がある場合減収となることから観察による防除を実施する。

薬剤の散布については1回で十分である。



圃場の端に見られるアブラムシの寄生

以上各薬剤防除にあたっては使用倍率、使用時期、使用回数を遵守し、隣接圃場への薬剤ドリフトに注意する。

## 麦 作

## 平成20年度・全国麦作共励会「農林水産大臣賞」

さがけんきしまぐんこうほくちょう  
佐賀県杵島郡 江北町・武富和也氏の麦作りを視察

北海道米麦改良協会 技監 天 野 洋 一

平成21年5月14日、昨年全国麦作共励会で農林水産大臣賞を受賞された武富和也氏の麦作りをみる機会を得た。そのときの印象と麦づくりの一端を紹介したい。

## 1. 江北町の農業の概要

博多から JR 長崎本線に乗り、交通網の要所・肥前山口駅で降りる。ひっそりとした駅でそこが武富氏のおられる町。杵島郡江北町は佐賀県のほぼ中央に位置し、北は緩やかな南斜面をなした山間山麓地帯で、南は平坦な農地で干拓地に注ぐ白石平野が大きく広がっている。「JA さが」の営農課農産野菜指導係、林武利さんに町と農業を案内いただいた。北部の丘陵地帯では畜産、果樹栽培がさかんで、南部は大半が水田で、お邪魔した5月は水田一面が麦秋の時期であった。水田は基盤整備がきちんと行われている印象で、筑後川、六角川の水利用を中心に水田がきちんと区画整備され、一枚一枚の水田は平均50aの大きさで、ブロックローテーションを可能とする生産基盤が充実していた。大きな共同乾燥施設が完備しており、北海道を思わせるような大規模な水田が拡がり、純粋な農村地帯との印象をもった。(写真1)



写真1. 江北町の共同乾燥調製施設と裸麦

江北町の耕地面積は1100haあり、うち大半が水田で畑地、樹園地はわずかである。農業は稲、麦類、大豆の主要農作物を中心に、野菜、花卉、果樹、畜産をとりいれた複合経営が実践されている。生産額では水稲が最も多く3億9千万円で、次いで畜産、麦類、玉葱の順となっている。麦では1億7千万円の生産額をあげ、二条大麦、裸麦、小麦の3麦を、耕地面積の7割に作付けしている。1戸当たりの麦作付面積は2.8haで、府県としては極めて大規模である。麦作付けのうち小麦は2割を占め、二条大麦が6割、裸麦2割の割合になっている。小麦が少ないが、大麦、裸麦は成熟期が早く、小麦の収穫は10日ほど後となり、九州では小麦の収穫期に降雨に見舞われることも多くなるので小麦を多くは作付けできないとのことだった。

## 2. 武富さんの麦作りの概要

武富氏は11.6haの農地をもち、麦、水稲、大豆の主要農作物を中心に、一部野菜作を行っている。秋に麦類を播種し、6月の麦収穫後に水稲と大豆を作付けしている。耕地面積の大半の11haに麦類が作付けされ、6つの団地、1団地平均180aでブロックローテーションを組んで作物を循環させている。自宅から3km以内に農地が集約され、一枚の田は平均50aと大きく、平坦で基盤整備が進んでいる印象だった。当日は家族全員裸麦の収穫で忙しく、和也さんが収穫、奥さんは運搬と補助、両親は自宅で乾燥、調製に当たってお



写真2. 武富氏の乾燥機。裸麦の乾燥調整中で刈取り水分は23%



写真4. 武富氏の小麦「シロガネコムギ」、土寄せ明渠がはっきり。



写真3. 裸麦収穫中の武富氏ご夫妻とJA さが・林さん（中央）



写真5. 播種条件が悪く出芽不良となり、最終的に雑草繁茂。

られた。(写真2、3)

武富氏の麦作は、裸麦・小麦の2種を作付け、作期分散を考えて、裸麦600a、小麦500aとなっている。九州は国内でも雨の多いところで、特に梅雨に近くなる収穫期には雨が多く、穂発芽が問題になる。小麦だけの栽培は不可能とのことだった。

本年は、裸麦「イチバンボシ」は7部作の出来(昨年は516kg/10a)で、小麦「シロガネコムギ」は昨年並み(694kg/10a)の収穫が見込まれるとの予想で、小麦は良い生育をしていた(写真4)。本年は収穫時の天候に恵まれ、品質は良好で、裸麦の刈取り水分は23%と低い値であった。しかし、まもなく雨になるのではと天候を気にしておられた。

本年作は播種時および播種後の冬期に雨が多く、湿害により整地状態が悪く、また発芽

と生育初期に被害を受け、スタンド数が十分確保されていない圃場が発生した。畑地状態で播種を迎える大豆後の作付けでは播種床は良い状態で作れるが、水稻の後ではうまくいかないケースがある。うるち米の後は比較的時間があり排水がうまくいくことが多いが、特に糯米の後は収穫時期が遅く、播種床の条件が悪くなることが多い。写真の水田ではスタンドが確保されず雑草がひどく繁茂する結果となった。(写真5)

### 3. 水田作での麦作りの工夫

水田地帯での麦作りは排水対策がもっとも重要な作業である。当該地区の土壌は重粘土で、雨が降ると排水悪く、乾燥時はガンガンに堅くなり、作業が大変な土壌(写真)である。プラソイラー等で耕土を軟らかくし、気

相を多くすることが重要となる。そのために圃場をいかに乾かすかがポイントで、理想は畑地状態で輪作を組むことだが、九州ではそのことは難しく、多くは水稲後に麦を播かざるをえない。そのため播種床を作る。

**(写真6、7)**

九州ではいまでも播種床をつくり、明渠を掘り、土入れや土寄せを行うのが一般とのことである。雨水をできるだけ早期に圃場より出し、土壌を乾かすことが大切だからである。これらの技術は北海道の転換畑で排水の悪いところは参考となる技術と考えられる。

武富氏は、排水対策として、播種前に埋設された有材暗渠（コルゲート管）に直交する形で深さ30～40cmにプラソイラーを引いている。また、中耕、土入れ、土寄せ、畦立ての一連の作業のうち、土入れの明渠（畦間明渠）と土寄せを行い乾田化を図っている。

踏圧も重要な作業である。湿害と逆に土壌が乾燥するケースもあるので、踏圧は生育をコントロールする作業として重要で、武富さんは4回実施している。

武富氏は、低コストな土作りとして有機物の稲わら鋤込み、石灰の施用による分解促進を行っている。

九州は赤かび病が大きな問題であり、防除は必須。開花始めから穂揃い期にかけてトラクターで水和剤散布を2回行っている。

収穫はできるだけ低コストとするように努め、品質の確保を考慮しながら、刈り取り水分を25%以下で収穫するようにしている。乾燥機の容量で高水分収穫は難しい。



**写真6. 麦の播種床と土入れ明渠。最終的には溝は深くなる。**



**写真7. 土壌は非常に粘質が強い。**

## 麦 作

## 6月の営農技術対策

平成21年5月27日

北海道農政部

## 3 か 月 予 報

平成21年5月25日 札幌管区气象台発表

## &lt;予想される向こう3か月の天候&gt;

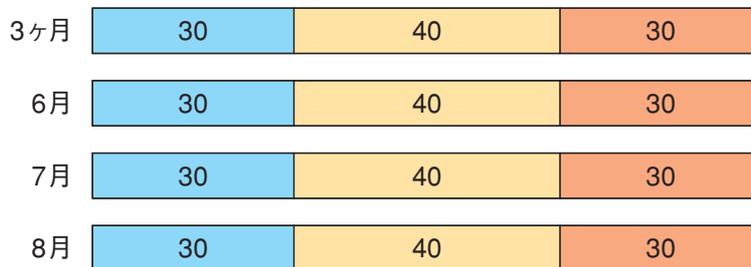
向こう3か月の出現の可能性が最も大きな天候は以下のとおりです。

- 6月 天気は数日の周期で変わるでしょう。一時的に冷たい気流の影響を受ける時期がある見込みです。
- 7月 天気は数日の周期で変わるでしょう。一時的に冷たい気流の影響を受ける時期がある見込みです。
- 8月 平年と同様に晴れて暑い日がありますが、寒気の影響で天気がぐずつく時期もある見込みです。

## &lt;向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率（％）&gt;

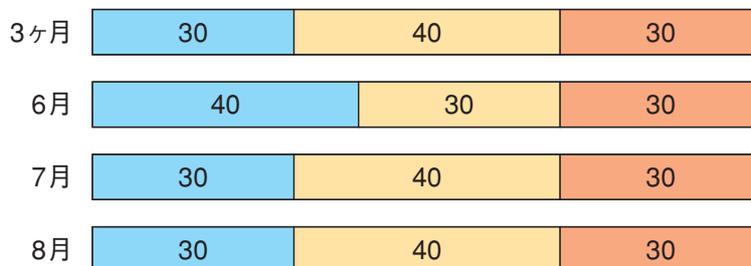
## &lt;気 温&gt;

## 北海道地方



## &lt;降 水 量&gt;

## 北海道地方



平成21年5月25日に札幌管区气象台が発表した3か月予報は上記のとおりです。

今後も気象情報に注意しながら次の事項を重点に営農指導の徹底に努めてください。

## ○ 麦 類

## 「今月の重点項目」

(秋まき小麦)

- ・窒素の分追肥は、生育状況に応じて施用し、過度とにならないようにする。また、品種に対応した窒素施肥法を遵守する。
- ・赤かび病防除は開花始からの適期防除に努める

(春まき小麦及び二条大麦)

- ・除草剤は、散布時期を逸さないよう適正散布に努める。

## 1 秋まき小麦

## (1) 追 肥

窒素の後期追肥を行う場合は生育状況を良く確認し、倒伏しないよう、また、登熟が遅れないよう多肥とせず、地域の標準量を守る。また、「新ランク区分」の蛋白基準を目標に、茎数、葉色により後期追肥の可否判断を行う。特に道東の「ホクシン」では、子実蛋白含量が高くなり粉色が低下しやすいので、通常年で子実蛋白含量が10.5%以上になるほ場では、止葉期以降の追肥や尿素の葉面散布を避ける。

「きたほなみ」では、収量水準が高い、あるいは養分吸収が阻害されるほ場で、低タンパクが懸念される場合は、開花後に尿素2%溶液の葉面散布(3回程度)を行う(「めん用秋まき小麦「きたほなみ」の高品質安定栽培法(平成20年普及推進事項)」)。

## (2) 植物成長調整剤の使用

倒伏防止のために莖稈伸長抑制剤を使用する場合は、「防除ガイド」に付帯している「植物成長調整剤使用ガイド」を遵守する。また、近接する農作物に飛散しないよう風向等に注意する。

## (3) 湿害対策

転換畑で隣接水田からの浸透水による湿害のおそれがある場合は、排水溝を設け湿害防止に努める。

## (4) 除 草

雑草の発生が多いほ場では、種子が結実する前に抜き取りを行う。

## (5) 採種圃での管理

異品種や異型株などの抜き取りと病害虫の

適正防除を行い、良質種子の生産に努める。

## 2 春まき小麦及び二条大麦

## (1) 除 草

除草剤は、葉齢を的確に把握し適期に散布する。また、近接する農作物に飛散しないよう風向等に注意する。

## (2) 初冬まき栽培

止葉期以降の窒素施肥量は、品種によって対応が異なる。品種に適した施肥対応に努める。

「ハルユタカ」の止葉期以降の窒素施肥は、止葉期に6 kg/10aを上限として追肥する。なお、倒伏が懸念される場合は、止葉期の追肥を出穂期まで遅らせる。

「春よ恋」の止葉期以降の窒素施肥は、開花期以降に尿素葉面散布(2%尿素100g/10aを1週間おきに3回)、または出穂期に窒素3 kg/10aの追肥を行う。「春まき小麦「春よ恋」の初冬まき栽培適性(平成17年普及推進事項)」

「はるきらり」の止葉期以降の窒素施肥量は、止葉期6 kg/10a+開花期以降3~4 kg/10a(葉面散布3~4回)とする。「パン用春まき小麦「はるきらり」の高品質安定生産法(平成20年普及推進事項)」

## 3 病害虫

病害虫の防除に当たっては、近接する農作物に飛散しないよう、風向等に注意する。

## (1) ムギキモグリバエ

春まき小麦ではムギキモグリバエの発生に注意し、多発地帯では適期防除を実施する。防除適期は5月下旬~6月中・下旬で、遅播

きでは5月下旬～7月中旬である。薬剤散布は少なくとも2回必要である。

**(2) うどんこ病、赤さび病、赤かび病**

3病害については、赤かび病の防除を最優先とし、うどんこ病、赤さび病の防除に際しては、防除の必要の有無も併せて考えて、薬剤を選択する。

**ア** うどんこ病は、発生状況を考慮し必要に応じて、止葉の下葉展葉期から防除を開始する。

**イ** 赤さび病は、感受性品種の「ホクシン」での発生動向に注意し、止葉や下葉に蔓延しないよう防除する。薬剤の選択に当たっては、うどんこ病・赤かび病の防除薬剤を考慮に入れる。本病の防除は「ホクシン」では止葉抽出期から穂ばらみ期および開花始（赤かび病の1回目と同時防除）の2回行う。

**ウ** 赤かび病は開花期～開花盛期が好適な感染期で、この時期に湿度が高いと多発しやすい。開花期が最も感染しやすいので、生育状況や気象状況に注意し、開花始に1回目の散布を確実にを行う。散布には赤かび粒率、総体DON濃度および外観健全粒のDON濃度に効果の高い薬剤を選択する。薬剤散布は秋まき小麦で2回、春まき小麦「春よ恋」で3回、「ハルユタカ」で4回、7日間隔での散布を基本とする。特に「ハルユタカ」では、発生が多いので防除を徹底する。

**エ** 耐性菌の発生を避けるため同系統の薬剤は使用しない。

## 平成21年産 秋播小麦冬損等被害状況概数集計表（5月15日現在）

北海道 N O S A I  
(北海道農業共済組合連合会)

	共済引受		転作（鋤返し）申出面積				主な被害 (雪腐病菌の種類等)	起生状況	過去3年転作面積率 (転作確認後)			過去20年間の 転作面積率 (平均)	摘 要
	組合 等数	秋播小麦 引受見込面積	5月15日現在		〈参考〉 H20年5月15日現在				18年	19年	20年		
			概数面積	転作面積率	概数面積	転作面積率							
石 狩	1	ha 7,700	ha 15.7	% 0.2	ha 37.2	% 0.5	褐色小粒菌核病 紅色雪腐病 鳥獣害	並	% 2.3	% 0.3	% 0.4	% 2.5	
空 知	4	15,541	67.2	0.4	124.1	0.8	褐色小粒菌核病 紅色・褐色雪腐病 凍上 滞水	並～良	10.2	0.6	0.6	3.0	
上 川	3	9,434	120.0	1.3	62.0	0.7	褐色小粒菌核病 紅色・褐色雪腐病 フラノ	並～不良	2.5	0.2	0.4	3.7	
留 萌	1	845	1.5	0.2	10.0	1.3	滞水	並	1.2	0.2	1.2	0.6	
後 志	1	1,223	4.3	0.4	6.1	0.5	褐色小粒菌核病	並	4.2	0.9	0.3	4.4	
道 南	1	479	1.6	0.3	0.3	0.1	滞水	並	0.0	0.0	0.0	0.2	
日 胆	2	2,095	10.6	0.5	3.6	0.2	褐色小粒菌核病 紅色雪腐病 凍上	並	0.1	1.6	0.1	1.2	
十 勝	2	45,480	44.0	0.1	375.0	0.8	黒色小粒菌核病 凍上 滞水	並～良	0.0	0.8	0.6	0.8	
根 釧	1	193	0.0	0.0	0.0	0.0		良	0.0	0.0	0.0	0.7	
北 見	1	24,327	36.8	0.2	110.0	0.4	黒色・褐色小粒菌核病 凍上	並～良	0.1	0.3	0.3	1.3	
計	17	107,317	301.7	0.3	728.3	0.7		並	1.9	0.6	0.5	1.6	

## &lt;最近年次の転作面積率（全道平均）&gt;

単位：%

元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年
1.5	0.5	0.5	3.8	3.4	4.1	1.0	1.8	2.2	0.4	5.0	0.4	1.1	0.7	1.6	0.5	0.2

注1) 秋播小麦引受見込面積は、当初引受（2月時点）の面積である。&lt;確定前&gt;

注2) 「転作申出面積」は農家申告等による転作（鋤返し）希望面積であり、確定転作面積ではない。

## 良質米麦の出荷目標

---



一等米 100%  
整粒歩合80%以上確保  
精米蛋白質含有率6.8%以下  
仕上がり水分14.5～15.0%  
入れ目1%以上確保  
全量種子更新



一等麦 100%  
低アミロ麦皆無  
DON暫定基準値1.1ppm  
以下でできるだけ低いこと  
赤かび粒混入限度 0.0%  
異臭麦皆無  
十分な入れ目の確保  
全量種子更新

---



発行所

社団法人 北海道米麦改良協会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目 共済ビル5階 TEL 011-232-6495 FAX 011-232-3673

【業務部】E-mail beibaku@basil.ocn.ne.jp

【検査部】E-mail beibaku-kensa@carrot.ocn.ne.jp

北海道米分析センター

〒069-0365 岩見沢市上幌向町216の2 TEL 0126-26-1264 FAX 0126-26-5872

E-mail bun1@plum.ocn.ne.jp

<http://www.beibaku.net/>